

農作物技術情報 第6号 花き

発行日 平成29年 8月 31日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<http://i-agri.net/Index/gate002>」

- ◆ 共通 灌水管理、病虫害防除を徹底し、良品の出荷に努めましょう。
- ◆ りんどう 収穫後、翌年に向けた管理を徹底しましょう。
- ◆ 小ぎく 健全な親株を確保・養成しましょう。
- ◆ 施設花き 施設の風通しなどの環境管理に注意しましょう。

りんどう

1 生育概況

早生種は、やや遅い～遅い開花となった地域が多くなりました。晩生種については、ほぼ平年並で推移しています。

病虫害は全般的に目立った被害はありませんが、病気では黒斑病、葉枯病、害虫ではハダニ類、オオタバコガなどの発生が散見されます。今後の重要病害である花腐菌核病は、今のところ子実体（きのこ）の発生は多くは見られませんが、各地域の普及センター等の情報を参考に防除を開始してください。

2 圃場管理

乾燥気味の場合には、乾燥する前に通路等に灌水します。ただし、長時間にわたり水を溜めることは避けてください。

また、圃場の過湿が心配な場合は、病害や根腐れ症状を回避するため、水路などからの水の流入を防止するとともに、長時間滞水しないよう排水路の点検を行いましょう。

3 病虫害防除

(1) 花腐菌核病

菌核にできた子実体（きのこ）から胞子が飛散し、花卉に付着して感染しますが、気温の低下に伴い、冷涼地から胞子の飛散が始まります。県北部では概ね8月下旬から9月上旬にかけて子実体（きのこ）の発生が多く確認されます（写真1a、1b、1c）。

これから開花する品種については、各地域の普及センター等の情報を参考に適用薬剤での防除を開始してください。



花腐菌核病被害花
(写真1a)



株元に形成された子実体
(写真1b)



菌核上に形成された子実体
(写真1c)

(2) 葉枯病

秋季にも拡大する場合がありますので、今後収穫する品種と併せ、収穫終了した品種も防除を継続します。

(3) 黒斑病

一部地域で発生が見られますが、今のところ特に問題とはなっていません。葉表面の傷口から容易に感染しますので、効果のある薬剤を発病前から9月中旬にかけて散布し予防してください。

(4) ハダニ類

各地域で発生が続いており、上位葉への寄生も見られています。気温の低下に伴い発生は減少しますが、概ね9月上～中旬まではハダニ類の密度を下げるように防除を徹底します。葉裏へ十分薬剤が付着するように薬剤散布を行います。

(5) アザミウマ類

収穫後の残花で増加している場合があります。蕾が着色する頃から寄生して花の内部で増殖するので、その時期から防除を徹底し、収穫後の残花の着いた茎部分を折り取ります。圃場周辺の作物や雑草の防除も併せて実施します。

(6) リンドウホソハマキ

一部で発生が見られますが多くはありません。被害が見られている圃場では防除を継続するほか、被害茎の折り取りを徹底します。また、定植株への被害も見られますので採花年株とあわせて継続して防除します。

(7) オオタバコガ

地域によっては、発生量が多くなっています。圃場をよく観察するとともに、地域の発生予察情報に注意しながら、発生が見られる場合は効果のある薬剤により防除してください。

4 収穫後の管理

(1) 早生・中生種では、生育の状況により収穫後に窒素成分で3～5kg(10aあたり)を追肥し、株養成に努めます。

(2) 収穫後の圃場では防除が手薄になり病害虫が多発する場合があります。翌年の発生源となるので、収穫後も防除を継続してください。収穫後の薬剤は葉の汚れへの配慮は不要なのでコスト低減も考慮して選定してください。

(3) 害虫や花腐菌核病の防除のため、残花のある茎部分を折り取ってください。この作業は株養成のためにも効果的です。また、定植年の株でも開花しますので、できるだけ花を摘み取ります。

小ぎく

1 生育概況

8月咲き品種については、開花は遅めで推移しました。9月咲き品種においては、概ね平年並で推移しています。

病害虫では白さび病、ハダニ類の発生が散見されます。オオタバコガは地域によっては増加傾向にありますので、各地域の普及センター等の情報を参考に防除を徹底してください。

2 灌水

小ぎくの根は過湿に弱く、多湿条件下では生育障害が発生します。降雨が続くような場合、長時間圃場に滞水しないよう排水対策を行ってください。

一方、圃場が乾燥している場合、品質低下や蕾の発達が遅れる原因となりますので、適宜灌水を実施します。ただし、長時間水を溜めることや高温時の灌水は避けてください。

3 病虫害防除

(1) 白さび病

5～7日間隔で薬剤散布し予防することが基本ですが、既に発生が見られている圃場や降雨が続く場合は、散布間隔を狭めて防除してください。

(2) オオタバコガ

発生状況に注意しながら、これまでどおり各地域の防除ごよみや各種防除情報を参考に防除を徹底してください。

(3) その他

ハダニ類、アザミウマ類、アブラムシ類の発生も見られていますので、防除を継続します。

4 母株選抜・養成

翌年採穂用の母株は、収穫前の選抜を徹底します。特に、えそ病やわい化病の感染株は、見つけしだい株ごと抜き取り圃場に残さないようにしてください。また、下葉からの枯れ上がりが見られる株は、土壌病害が原因となっているものもあります。翌年の苗にすることで感染が広がることも考えられますので、枯れ上がりが見られた株の母株への使用は避けます。

残した株は病虫害防除を継続し、茎葉が伸びた場合は適宜台刈りを行います。また、マルチ栽培の場合には収穫後すぐにマルチをはがし、追肥と土寄せを行います。

次号は9月28日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。

中央農業改良普及センター県域普及グループは、地域農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。